



THE MAGIC NORTH

北欧 の 神秘

ノルウェー・スウェーデン・
フィンランドの
絵画

ART FROM NORWAY, SWEDEN AND FINLAND

PRESS RELEASE



SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

2024.3.23 SAT. - 6.9 SUN.

「北欧の神秘 —ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画」展

☆☆☆

本展覧会は、北欧の中でもノルウェー、スウェーデン、フィンランドの3か国に焦点を定め、19世紀から20世紀初頭の国民的な画家たち、ノルウェーの画家エドヴァルド・ムンクやフィンランドの画家アクセリ・ガッレン=カッレラらによる絵画をご紹介します。

北欧は洗練されたデザインのテキスタイルや陶磁器、機能性に優れた家具の制作地として知られていますが、同時に優れた芸術作品を生み出す土壌でもあります。19世紀、ナショナリズムの興隆を背景に、それまでヨーロッパ大陸諸国の美術に範をとっていた北欧の画家たちは、母国の自然や歴史、文化に高い関心を寄せるようになりました。各地の自然風景、北欧神話や民間伝承の物語が、画家たちの手によって絵画や書籍の挿絵に表されました。

ヨーロッパの北部をおおまかに表す北欧という区分は、一般的にノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、アイスランドの5か国を含みます。このうち最初に挙げた3か国はヨーロッパ大陸と地続きにありながらも、北方の気候風土のもとで独特の文化を育みました。

このたび、ノルウェー国立美術館、スウェーデン国立美術館、フィンランド国立アテネウム美術館という3つの国立美術館のご協力を得て、各館の貴重なコレクションから選び抜かれた約70点の作品が集結します。本展で北欧の知られざる魅力に触れていただければ幸いです。

見どころ

☆☆☆

1 本邦初、北欧の絵画にフォーカスした本格的な展覧会

ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの国立美術館から約70点の作品が集結！

北欧3か国を代表する画家たちをご紹介します。

ノルウェーからはムンクに加えて、森にすむ動物や怪物の登場するおとぎ話の世界を描いたテオドル・キッテルセン、そしてスウェーデンからは劇作家・小説家アウグスト・ストリンドバリによる絵画が出品されます。

2 北欧はおしゃれな家具やデザインだけじゃない

北欧のシンプルで機能的な家具や、かわいらしいデザインの雑貨や服は、日本でも広く知られています。

しかし、19世紀以降、北欧特有の雄大な自然風景、神話や土地に伝わる民話を主題とした独自の絵画の流れが現れました。本展では北欧3か国の絵画を通して、これまでのイメージとは異なる北欧の一面をご紹介します。

ファンタジー

3 都会の中の別世界

ヨーロッパの強国に対峙して社会的・文化的な独自性を追求した北欧諸国の超克の歴史は、特徴的な自然風景や気候を描いた北欧ロマン主義絵画の背景を形作っています。

広大な山々や荘厳な滝、流水の漂う海、白夜・極夜の下での神秘的な光景、そして北欧神話や民間伝承は、文学やファンタジー映画、アニメ、RPGゲームのイメージソースとしても頻繁に取り上げられています。

超高層ビルの裾野、新宿の喧騒を抜けた美術館で、北欧の神秘的な世界に触れる機会となるでしょう。

美術館紹介

☆☆☆

ノルウェー国立美術館

NASJONALMUSEET - THE NATIONAL MUSEUM OF NORWAY

1837年、ノルウェーの首都オスロに開館。
2003年、ノルウェー国内の博物館の統合により、
絵画や建築、装飾芸術、デザイン、現代美術
といった幅広いジャンルを扱う美術館になる。
古代から現代に至るまで約40万点のコレクションを誇り、
2022年のリニューアルオープンによって
約6,500点を常設展示する北欧で最大規模の美術館となった。



Photo: Iwan Baan

スウェーデン国立美術館

NATIONALMUSEUM - SWEDEN'S MUSEUM OF ART AND DESIGN

1866年、スウェーデンの首都ストックホルムに開館。
所蔵品は、紙作品・資料約50万点を含む約70万点。
王室コレクションを基礎とし、
増改築を繰り返し機能を拡張しながら
スウェーデン屈指の歴史的建造物として保存されている。
16世紀から19世紀の美術、中世から現代に至るまでの
装飾美術や工芸、デザイン等を扱っている。

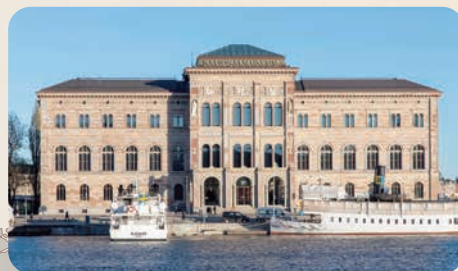


Photo: Anna Danielsson / Nationalmuseum



フィンランド国立アテネウム美術館

FINNISH NATIONAL GALLERY, ATENEUM ART MUSEUM

1888年、フィンランドの首都ヘルシンキに開館。
もとは、美術や工芸を学ぶ校舎として設立された。
フィンランド国立美術館のうち、近代美術を
主に扱い、約3万点のコレクションを持つ。
ロマン主義からシュルレアリスムに至るまで、
フィンランド美術や同時代のヨーロッパ諸国で
展開した美術を概観することができる。

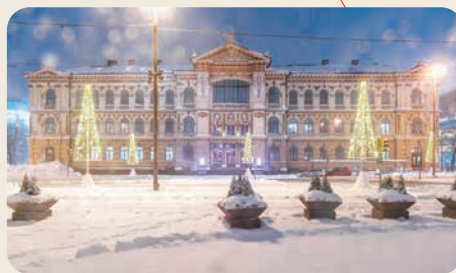


Photo: Finnish National Gallery / Hannu Pakarinen

序章 神秘の源泉

—北欧美術の形成

FROM LOCAL SOURCES

—A NORDIC ART TAKES FORM

19世紀、ナショナリズムの高まりを背景に、イタリアやドイツ、フランスの芸術動向に長い間追従してきた北欧諸国において、独自の芸術を探求する潮流が生まれた。故郷に特有の主題を求めた画家たちは、北欧の自然、北欧神話や民話に注目した。19世紀前半のロマン主義の影響から、北欧の地理的特徴を示すとともに、鑑賞者個人の記憶を呼び起こし、想像力を喚起する一連の風景画が生まれた。また古くから語り継がれる北欧神話、そして芸術とは縁遠い庶民にもなじみ深い民話を描いた絵画が多く制作され、当時の印刷・複製技術の発展とあいまって広く浸透した。



広報画像 1

ロベルト・ヴィルヘルム・エークマン
《イルマタル》

1860年、油彩・カンヴァスに貼った紙、
79×111.5cm、
フィンランド国立アテネウム美術館
Photo: Finlands Nationalgalleri / Hannu Aaltonen

当時のスウェーデン領(現在はフィンランド)に生まれたロベルト・エークマン(1808-1873)は、ロマン主義を代表する国民的画家としてフィンランドの民族叙事詩『カレワラ』を主題とする作品を多く残した。イルマタルは、『カレワラ』に登場する純潔の精霊、大気の女神であり、大地と空、太陽、星を創造した。物語の中心的人物、老賢者ヴァイナモイネンの母でもある。



広報画像 2

マルクス・ラーション
《滝のある岩場の景観》

1859年、油彩・カンヴァス、78×124cm、
スウェーデン国立美術館
Photo: Nationalmuseum

マルクス・ラーション(1825-1864)はスウェーデンのロマン主義風景画を代表する画家。デュッセルドルフで学んだ時期に海景画への関心を高め、荒れ狂う海で波にもまれる船舶や沿岸の風景を描いた。1850年代後半には曇天の下、岩の多い森の中を流れる大河や滝をドラマティックに描いた。本作は、崇高な自然の景観を主題とするラーションの風景画の特徴をよく示すものである。



広報画像 3

アウグスト・マルムストゥルム
《踊る妖精たち》

1866年、油彩・カンヴァス、90×149cm、
スウェーデン国立美術館
Photo: Cecilia Heisser / Nationalmuseum

アウグスト・マルムストゥルム(1829-1901)は、ヨーロッパ諸国でナショナリズムが高まった19世紀に活躍したスウェーデンの画家。この時期、各国特有の主題を描くことが重視されたことから、北欧神話や民間伝承への関心が高まり、絵画のモチーフとして民話に登場する精霊や怪物、妖精が取り上げられた。本作では月明かりの下、霧に煙る湖の上で妖精たちが手を取り合って踊り、その姿が湖面に映る幻想的な光景が展開されている。

I 自然の力

THE POWER OF NATURE

19世紀後半、ヨーロッパで興隆した象徴主義は、北欧の絵画にもいち早く浸透した。その背景にあった急速な工業化と都市開発は、やがて原始の状態への回帰、あるいは自然との調和という理想を人々の胸に呼び起こした。この自然への関心の高まりと並行して、北欧独自の絵画を探索する画家たちは、母国の地理的、気象的特徴に注目した。雄大な山岳や森、湖といった自然風景、そして北方の地に特徴的な現象である夏季の白夜、太陽が昇らない冬の極夜、そしてオーロラが多くの作品の題材となった。四季に応じた自然の変化は魅力的な主題となったが、特に冬の光景は北欧を特徴づけるものとして好んで取り上げられた。



広報画像 4

ニルス・クレーゲル

《春の夜》

1896年、油彩・パネル、48.5×60.1cm、
スウェーデン国立美術館

Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

スウェーデンの画家ニルス・クレーゲル(1858-1930)はパリに渡って学び、アメリカやヨーロッパ各地から作家の集うグレー＝シュール＝ロワン村の芸術家コロニーに参加した。帰国後、2人の画家リッカード・パリ、カール・ノードストホルムと西海岸のヴァールバリという小さな町を拠点に活動。象徴主義やゴッーギャンの提唱する総合主義を学び、本作のように力強く幻想的な風景を描いた。



広報画像 5

ニコライ・アストルプ

《ユルステルの春の夜》

1926年、油彩・カンヴァス、89.5×110.5cm、
ノルウェー国立美術館

Photo: Nasjonalmuseet / Frode Larsen

ニコライ・アストルプ(1880-1928)はノルウェーのモダニズム絵画を代表する画家。ユルステルはアストルプが生涯の大半を過ごした場所で、山々や湖、フィヨルドといった豊かな自然に囲まれ、民間に伝わる工芸や音楽などの文化的伝統を色濃く残していた。アストルプは、同じくノルウェーの画家エドヴァルド・ムンクに感化され、独特の鮮やかな色彩を用いて、ユルステルの自然や日常生活を描いた。



広報画像 6

ヴァイノ・ブロムステット

《冬の日》

1896年、油彩・木製パネル、26.5×52cm、
フィンランド国立アテネウム美術館

Photo: Finlands Nationalgalleri / Hannu Pakarinen

ヴァイノ・ブロムステット(1871-1947)はフィンランドの画家で、挿絵やテキスタイルのデザインなども手がけた。ペッカ・ハロネンとともにパリに渡り、アカデミー・ジュリアンで学ぶ。のちにゴッーギャンに師事し、象徴主義や日本美術の影響を受けた。19世紀後半に北欧諸国でナショナリズムが高まったのを背景として、フィンランド帰国後には、本作のように母国を特徴づける冬の自然風景を描いた。

北欧神話

キリスト教に改宗する前のゲルマン人が信仰していた神々の物語のうち、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、アイスランドなどの北欧地域に伝承されたものの総称。現在の北欧神話は、9-13世紀頃に成立した叙事詩『古エッダ』、13世紀アイスランドの詩人スノッリ・ストゥルルソンによる『新エッダ』などに収録された伝承や英雄譚を基盤に形成されています。北欧神話において世界は複数の領域に分かれ、世界樹ユグドラシルがそれらを繋いでいます。神々や巨人、人間、怪物、妖精が共存し、世界の終末「ラグナロク」でこれらすべてが滅び、新しい世界が誕生するとされます。

19世紀ノルウェーの動物学者ベーター・クリステン・アスピョーンセンは、少年時代からの友人ヨルゲン・モーとともに各地に語り継がれた民話を採集し、1841年に『ノルウェー民話集』を刊行しました。これは初めて書籍化されたノルウェーの民話集として国内外で注目を集め、追ってさらに民話集2巻が刊行されました。これらの民話には、少年アスケラッドや山に住むトルロガがたびたび登場し、囚われた姫の救出や農村の人々が巻き起こす騒動など、幅広い物語が展開されます。民話集に挿絵を寄せた画家テオドール・キッテルセンほか、多くの芸術家の着想源となっています。

ノルウェーの民話

CHAPTER II 魔力の宿る森

—北欧美術における
英雄と妖精

THE MAGICAL FOREST
—HEROES AND FAIRIES
IN NORDIC ART

19世紀のヨーロッパでは国家的、民族的アイデンティティへの関心が高まる中、各地で急速に失われていく土着の伝統文化が着目されるようになった。北欧の芸術家たちは、国際的な芸術的動向に目を向けると同時に、母国の文化的伝統に強い関心を抱き、土地に伝わる民話や伝承から着想を得た。北欧の民話やおとぎ話は、北欧神話、およびフィンランドの民族叙事詩『カレワラ』として知られる一連の物語から大きな影響を受けている。これらの物語の多くが舞台とするのは深い森であり、そこは魔法や呪いが効力をもち、人や動物ではない存在が住まう場所である。未知の冒険や神秘体験へと誘う神話やおとぎ話の世界は、北欧絵画を特徴づける主題となった。



テオドール・キッテルセン
《トロルのシラミ取りをする姫》
1900年、油彩・カンヴァス、45.5×68.5cm、
ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet / Børre Høstland

ノルウェーの画家テオドール・キッテルセン(1857-1914)は、自然の神秘的な側面に着目し、動物やトロル、妖精の登場する物語をイマジネーション豊かに描いた。本作は、トロルと囚われの姫を描いたもの。姫がトロルの体のシラミを取り、トロルは眠っている。そこへ少年アスケラッドが、姫を救出しにやってくる。



テオドール・キッテルセン
《アスケラッドと黄金の鳥》
1900年、油彩・カンヴァス、46×69cm、
ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet / Børre Høstland

19世紀半ば、少年時代からの友人であるペーテル・クリステン・アスビョーンセンとヨルゲン・モーは、ノルウェー各地に語り継がれた伝承、伝説を蒐集し、民話集を刊行した。キッテルセンは彼らによる『ノルウェー民話集』など、北欧の民話やおとぎ話を題材とする絵画や挿絵を多く手がけた。アスケラッドは「灰をいじる少年」という意味で、ノルウェー民話の多くに登場する主人公の呼び名。兄弟たちが見くびる末っ子アスケラッドだが、困難を乗り越え、ついには姫と結婚する。



ガーラル・ムンテ
《帰還するオースムンと姫》
1902-1904年、油彩・カンヴァス、62×126.5cm、
ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet / Jacques Lathion

ノルウェーの画家ガーラル・ムンテ(1849-1929)は、もとは風景画家であったが、装飾芸術に才を発揮。北欧神話を題材としたテキスト作品が高く評価され、ヨーロッパ全土に広まったアーツ・アンド・クラフツ運動にも身を投じた。本作を含むシリーズの中で、物語の主役オースムンは、王の命により、囚われの身となった姫を助け出すため、怪物の城へ一人乗り込む。そしてオースムンは怪物を倒し、財宝を手に入れ、姫と共に帰還した。



フーゴ・シンペリ
《素晴らしい花》
油彩・カンヴァス、
38.5×28cm、
スウェーデン国立美術館
Photo: Cecilia Heisser /
Nationalmuseum



ガッレン=カッレラから絵を学んだフーゴ・シンペリ(1873-1917)は、象徴主義と独自のユーモアや遊びを兼ね備えた作風で知られている。空高く咲いた白い花が印象的な本作の主題は、貧しさや豊かさの対比である。粗末な服を身にまとった男は、花をありのままに楽しみたいと願う。一方で彼が悲しげに見つめるのは、高貴な身なりの男が、この花を独り占めするため、今まさに茎を切ろうとしている様子である。

19世紀における都市の発展は、人々の生活様式を大きく変化させただけでなく、諸芸術へも影響を及ぼした。かつて神話や歴史上的一幕が重要な主題と見なされた絵画の分野においても、街の景観や都市生活が新たな主題として登場し、同時代の現実が芸術の中へと引き込まれた。北欧らしい薄闇の中にある近代都市の神秘的な光景は、画家たちの想像力をかき立てた。工場や整備された街路を臨む都市風景、そして近代化の波を待つ郊外の風景が取り上げられた。また、画家たちは日常生活に親しみをこめたまなざしを投げかける一方で、都市開発の陰で増大する貧困や病といった負の側面にも目を向け、最下層の人々の生活を迫真的に描いた。



広報画像 11

エウシェン王子

《工場、ヴァルデマッシュウッデから
サルトシュークヴァーン製粉工場の眺め》

油彩・カンヴァス、90×100cm、

スウェーデン国立美術館

Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

エウシェン王子(1865-1947)は、1887年から1889年にかけてパリへ留学し、スウェーデンのロマン主義を代表する風景画家となった。本作で描かれているのは、1905年に移り住んだ地から、旧都の古い工場を望む光景。ストックホルム中心部にほど近い位置にありつつ、田園地帯が残る地域で、写実性よりも個人の感覚の表現を追求した。また、このように人工の光に包まれた夜景は、世紀転換期のスウェーデンで繰り返し描かれたモチーフである。

広報画像 13

アクセリ・ガッレン=カッレラ

《画家の母》

1896年、テンペラ・カンヴァス、33×29cm、

スウェーデン国立美術館

Photo: Bodil Beckman / Nationalmuseum

アクセリ・ガッレン=カッレラ(1865-1931)は、フィンランドの民族叙事詩である『カレワラ』を題材にした作品でよく知られている。画家の母は、神秘主義や神智学へ大いに関心を寄せていた。ガッレン=カッレラが自然主義から象徴主義へと転向したのは、彼女の影響が大きい。瞑想にふける姿と、その背景にある幻想的な光景が、彼女の思想を視覚的に表現している。



広報画像 12

アウグスト・ストリンドバリ

《街》

1903年、油彩・カンヴァス、

94.5×53cm、

スウェーデン国立美術館

Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

アウグスト・ストリンドバリ(1849-1912)は、19世紀の北欧で最も重要な作家のひとり。ごく短い間だが、画家としても活動した。ただし美術教育は受けておらず独学で、文筆に行きつまったときに絵を描いていた。彼が書く文章では、人間模様がきめ細かに描写されているのとは対照的に、絵画には人物が全く登場しない。さらに、モチーフが不明瞭で、暗闇に包まれた風景は、文明や文化のシンボルであるはずの都市のイメージとはほど遠い。

『カレワラ』

フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』は、フィンランドおよびロシア北西部のカレリア地方で語り継がれてきた民話や詩を集めたものです。19世紀フィンランドの医師エリウス・ロンルートが自ら採集した民間伝承を編集し、1835年に初版を刊行しました。物語は大気の精霊イルマタルによる天地創造に始まり、老賢者ヴァイナモイネン、鍛冶屋イルマリネン、若者レンミンカイネンを主な登場人物として、冒険や結婚、戦いが繰り返されます。フィンランドの作曲家ジャン・シベリウスや画家アクセリ・ガッレン=カッレラなど、多くの芸術家が『カレワラ』から着想を得た作品を残しています。



エドヴァルド・ムンク《ベランダにて》

1902年、油彩・カンヴァス、86.5×115.5 cm、ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet / Børre Høstland

展覧会名	北欧の神秘 —ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画 The Magic North: Art from Norway, Sweden and Finland
会期	2024年3月23日(土) — 6月9日(日)
会場	SOMPO美術館 〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
休館日	月曜日(ただし4月29日、5月6日は開館 振替休館なし)
開館時間	10:00-18:00(金曜日は20:00まで) ※最終入場は閉館30分前まで
観覧料(税込)	一般/事前購入券1,500円、当日券1,600円 大学生/事前購入券1,000円、当日券1,100円 高校生以下無料 身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料、被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料 ※事前購入券は公式電子チケット「アソビュー」、e+ (イープラス)、ローソンチケット、チケットぴあなどでお買い求めいただけます ※購入方法等詳細は美術館ホームページをご確認ください
主催	SOMPO美術館、NHK、NHKプロモーション、朝日新聞社
特別協賛	SOMPOホールディングス
協賛	DNP大日本印刷
特別協力	スウェーデン国立美術館、フィンランド国立アテネウム美術館、ノルウェー国立美術館、損保ジャパン
協力	フィンエアー、フィンエアーカーゴ
後援	スウェーデン大使館、フィンランド大使館、 ノルウェー大使館、新宿区
企画協力	S2
ホームページ	https://www.sompo-museum.org/
お問合せ	050-5541-8600(ハローダイヤル)
アクセス	新宿駅西口より徒歩5分

お
プ
レ
ス
合
わ
せ

「北欧の神秘」展

広報事務局(ウインダム内)

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11 鴨下ビル2階

TEL.03-6661-9447 FAX.03-3664-3833

e-mail sompo-m-pr@windam.co.jp

m national
museum

ATENEUM
FINNISH NATIONAL GALLERY

N
m